静岡の道の歴史

駿府繁栄の秘密

〈企画・制作／静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

東海道の拠点となる宿場の一つとして繁栄した駿府。繁栄を確固たるものにしたのは徳川家康によるまちづくりでした。

家康は将軍の座を退き、1607年に大御所として駿府に移り住みました。幼少期を過ごした思い出の地であり、江戸と上方（現在の京都、大阪）を結ぶ重要な地域でした。駿府に大工や車屋（運送業者）などまちづくりに必要な技術を持つ職人を呼び寄せ、城下町をつくりました。武士が住むところ、職人が住むところなど職業によって住むエリアが分けられました。それは「駿府九十六ケ町」と呼ばれ、今も紺屋町、呉服町、大工町など当時の町名が残っています。伝馬町は幕府の用事を済ませるための人や馬を留め置く場所、現在の静岡伊勢丹がある「札ノ辻」はお触れなどが張り出される町の中心、というように当時の人々の暮らしを表す町名も多くあります。東海道を多くの人や物が往き来していたことが分かります。

家康が亡くなった後は一時、頼宣、忠長が城主となり、以降は殿様のいない変則的な城下町になりました。家康がいた時代は「駿府大御所時代」と呼ばれ、道路の整備に力を入れて出来た駿府城下町は当時の日本を代表するような地方都市のモデルになりました。

駿府鳥観図（1708～09年ごろ、土佐光成、駿府博物館提供のデータを一部加工しました）

東街便覧図略（高力猿猴庵、名古屋市博物館蔵）

（監修：近江俊秀・文化庁文化財第二課主任文化財調査官、中村羊一郎・静岡市歴史博物館長、本郷和人・東京大史料編纂所教授）

2022年11月6日 静岡新聞「YOMOっと静岡」掲載